

「内部被曝の脅威」から希望の道へ

— 11・3肥田舜太郎さん講演会の報告 —

昨年11月3日（木）、前橋プラザ元気21・にぎわいホールにおいて広島での被爆体験を持つ元軍医・肥田舜太郎さんの講演会が行われました。これは、シネマ前橋の企画（映画『チェルノブイリ・ハート』上映と講演会）で催されたものです。被災地福島県浪江町に生まれ育ち、当日、司会を務めた針谷順子さんが自作の詩を添えて報告します。



講演会開催までのいきさつ

昨年の8月、前橋協立病院で肥田舜太郎さんのお話を聞く機会がありました。暑くて狭い会場には人が入りきれず、立って聞いている人達が沢山いました。私の実家のある浪江町から、原発事故で福島市に避難している人の娘さんが体調を崩して入院しているとか、郡山に避難している小学生が下痢が続いているという話を聞いて、ストレスのせいだろうなどと私は考えていたのですが、肥田さんの話でそれが内部被曝のせいなのだ分かりました。肥田さんは「日本中どこに行っても安全な場所、安全な食べ物は得られないだろう。私達が今なすべきは原発をなくすこと」と渾身の力をこめて話されました。



超満員の聴衆が肥田さんの話に耳を傾ける

肥田さんは94歳、広島陸軍病院に軍医少尉として赴任中被曝、それ以降65年にわたって被曝医療に携わってこられた方です。もっと大勢の方に肥田さんのお話を聞いてほしいと考え、ぐんま教育文化フォーラムの瀧口さんに相談して、鈴木みどりさんを実行委員長にして話を進めていくことになりました。

鈴木みどりさんは、私に昨年5月頃シネマ

前橋で上映された『みつばちの羽音と地球の回転』を紹介してくださった方でシネマ前橋との関わりも深く、ちょうど代表の小見純一さんから11月3日に映画「チェルノブイリ・ハート」の上映と肥田さんの講演会を企画しているという話を聞き、その企画に協力しようということになったのです。

講演会の様子

当日の会を支えたスタッフには、様々な人達が集まりました。参加者は約450名、年齢層も幅広く、特に赤ちゃんを抱いた若いお母さん達の参加が目立ちました。

生き残った者の使命

肥田さんは「28歳の時広島で被爆したが、当時の軍医で今生き残っているのは自分1人だけ。当時の状況やなすべきことを語り続けることが生き残った者の使命」と語り始めました。広島の被爆当時の状況、被曝治療の実態や歴史などが語られましたが、それ以外で深く印象に残ったことを幾つか書きます。

日本人が直面している現実

「これから日本で生きていけば、どこに住んでも放射線と無縁で生きていくことはできない。放射線と闘いながら生きていく覚悟を決めていくための話をしたい」と肥田さんは話されました。福島第一原発から放射性物質の放出が続き、54基の原発が稼働を続けられれば、日本全国どこにも逃げ場はない、内部被曝から逃げることはできない。それが日本人

が直面している現実だと、逃げずに、それと向きあうことを私達に厳しく求めたのです。ですから、「福島から遠く離れなさい。汚染されていない食べ物を選んで食べなさい」という政府を預かる人の言葉を、「日本には国民に責任を負うという立場で仕事をしている役人も政治家もいない」と肥田さんが批判されたのは当然でした。

放射能に負けずに生きるために

放射能の脅威に不安な気持ちを募らせている私達を、肥田さんは叱咤激励しました。「内部被曝したからといって、もうだめだと諦めるということでもない。放射能が入ってきて、発病をくい止めることはできる。広島で生き残っている被爆者は21万人いる。自分の命は自分で守るという自覚を持って、放射能に負けずに生きる努力を毎日する。具体的には、早寝早起き、食事は良く噛んで唾液を出す。お母さん達は覚悟を持って子供達や夫を躡けることだ」と、日本人が今まで当たり前やってきたことが、実は免疫力を作り、命を守る方法だということを知り易く説明してくださいました。講演会を聞き、「救われました」「元気ができました」という感想が多かったのは、危機的な状況でも諦めずに生き抜いてほしいという肥田さんの強い思いが伝わったからでしょう。

日本人の問題点

最後に肥田さんは日本人の問題点として、人権意識の低さを指摘されました。その人権意識とは「自分の生命の主人公は自分。自分が自分の生命に責任を持って毎日生きていくと自覚すること」だと肥田さんは言います。

長年医師をされてきた肥田さんから見ると、命は医者任せの人が実に多いのです。

人の命を削る原発をやめる

肥田さんは「今度の原発事故を起点に、原発から漏れ出てくる放射線が、毎日自分達の命を少しずつ削っているということに自覚し、それに侵されない体をどうやって自分が作るか、幾つになろうが、生きる限りは努力する。なんとなく生きている、これはダメ。人の命を削る原発をやめる。子や孫、曾孫にきれいな日本を残す、それを腹に据えて帰っていただきたい」としめくくりました。

若いお母さんの質問に答えて

「漠然と不安がるのではなく、仲間と一緒に放射線量を計り共に考えるように。今、日本に住んでいる限り、子供はいつか体内に放射能を取り込んでいくと覚悟を決めねばならない。自分の子だけ何とかして守ろうとすることにとらわれていると、原発を無くすという根本的な問題が見えなくなってしまう。沢山の人の心配がなくなるには、放射線を出す元をなくさせること。道は遠いようだが、1人がその気になってやることで、全体の力を強めていく。そういう発想に立つことが大切」と、厳しい現実の前で思い悩むお母さん達に、本当の解決の道を忘れないように心を込めて話されました。

会場からの質問に答える肥田さん

講演を終えて

子供達がこの日本に住んでいる限り、体内被曝から逃れられない国に日本をしてしまった大人の責任は計り知れない。けれども一方で、政府も、官僚も、信じられなくなって、それらの人々の出す情報が全く信じられなくなって、自分達で線量を計る人達がどんどん



会場からの質問に答える肥田さん

増えてきた。自分達を守るのは自分達だと動き出す人々が増えて、本当の民主主義が生まれようとしているのかとも思う。そうじゃない動きもしぶとくあるが、今までにない変化が出て来ているのも事実。

【文責：針谷順子・写真撮影：長谷川陽子
カット：倉林順一】



講演会終了後の記念撮影（中央が肥田さん）

参加者の感想より

たくさん寄せられたアンケートの中から、30代の方々の感想の一部を紹介します。

- ★ 今、日本で起きてしまった現実におびえてばかりの毎日でしたが、お話を聞いて、向き合って前向きにいこうという気になりました。子供がいるので、とても心配していました。
- ★ 肥田先生のパワーにびっくりしました。見えない不安が日々ありますが、先生の

話を聞いて、まずは健康的な生活をします。先生の考え方、自分だけ自分の子供だけを守ることを考えるより、今後の日本をみんなで守る考え方が、みんなに必要なんだと思いました。

- ★ 人間として、根本的な考え方を教えてもらった気がします。今回の事故で生活は一変しました。乳児を持つ親として放射能が心配で、試行錯誤の日々でしたが、今日は大事なことを教えてもらいました。汚染地域の群馬で生き、子育てしていく上で、前向きに生きる心構えを学びました。ありがとうございました。是非長生きして、より多くの人に話をきかせて下さい。
- ★ 肥田先生のお話を聞いて、私も覚悟を決めなくては、腹をくくって生きていかなくては、と思いました。くよくよ嘆いても何も始まらない。何も変わらない。日本を変えていくために、未来を変えていくために、今、何かを始めなくては、と強く思いました。でも、その「何か」って何だろう？・・・「脱原発！」「十分な議論が交わされないままの原発再開には絶対反対！」そんな市民の声を政府や電力会社に確実に届ける方法を皆で考え、実行していきたい。

「それが、希望というものだ」
針谷 順子

兄は今、双葉郡の浪江町から避難して郡山市に住んでいる。

退職して始めた「竹炭」作り。人生をもう一度生きていこうだと言っていた。驚くような緻密な研究を重ねて竹炭の指導者になっていたのだが…。

今は郡山の竹炭仲間を支えられ、浪江の未来を考えている。

若い者は戻らない、年寄りだけでは町に未来はないというけれど、

年寄り達は三十年後を考える。子や孫や曾孫がふるさとを思い出した時、戻るふるさとがあるように、お参りできる墓があるように、浪江に戻って準備する。

残った命の使い方、自分自身で決めるのだ。それが希望というものだ。

兄は福島で生きている。(H23.12.28)

(H23.12.28 政府は双葉郡内に放射能汚染物の中間貯蔵施設を設置することを要請した。)